第27回　岡倉天心記念　がん哲学外来　巣鴨カフェ「桜」

令和３年 ９月11日

言葉の処方箋

いい覚悟で生きる　樋野　興夫　P38

あなたには死ぬという 大切な仕事が残っている

死は誰にでも訪れるものです。
人生の終わりに迎える死は、最後に残された大きな仕事です。

「まさか自分ががんになり、余命宣告を受けるとは夢にも思いませんでした」がん哲学外来に来る患者さんのほとんどがそう言います。
「青天の霹靂」と言う人もいます。晴れ渡った空に突然起こる雷のような「がん告知」は、まさに突然受ける衝撃です。

人間は言葉で考え、言葉で悩みます。希望を見失った患者さんには、どんな言葉もむなしく響くだけですし、差しさわりのないきれい事を言っても力にはなりません。患者さんを力づけるような言葉とは、心に深く共振する言葉です。人間の尊厳にふれる言葉と言ってもいいかもしれません。それは時に、遠慮のない言葉になることがあります。

ある日、がんが体中に転移して手の施しようがなく、余命宣告をされた患者さんが来ました。この人は、残された時間を絶望の中で待つことに耐えきれず、自殺を図ったけれど死ねなかったと言います。

「希望を捨てずに頑張りましょう」と周囲の人たちは声をかけたそうです。その言葉は患者さんにとってあまりにも残酷に響き、かろうじて張りつめていた 細い糸を断たれた思いがしたそうです。

死にきれなかった自分をどうすることもできず、気力を失った表情でぽつりぽつりと話す患者さんに私は言いました。
「それでも、あなたには死ぬという大切な仕事が残っていますよ」
しばらくの間、その人はうつむいたままでした。私は黙って待ちました。
「わかりました。なんとか頑張ってみます」

突然、顔を上げてそう言ったのです。私には、患者さんの背筋がすっと伸びたように見えました。

最初は、「死ぬという大切な仕事」という遠慮のない言葉に驚いたかもしれません。おそらく頭で理解したのではないでしょう。しかし、私も全身全霊をもって選んだ言葉です。人間の尊厳にふれるような深いところで、自分という 存在や今確かにあるいのちを思い出したのかもしれません。がんと「向き合う」ことから、がんに自分を「ゆだねる」ことに変えられたとしたら、きっと少しだけ心の深呼吸ができたはずです。

家族と一緒に来る患者さんに対しても、私は遠慮しないでこの言葉の処方箋を口にします。「死」という言葉に動揺する家族もいます。それでも、患者さんの多くは、落ち込んでいた表情がパッと変わるのです。

なすすべもないと思っていた自分に「大切な仕事」が与えられているとは、まさかと思うのではないでしょうか。死に向かってどう生きるかという最後の仕事を立派に務めあげたいという決意が、やがて患者さんを高揚させます。

人間は、人生に期待すると簡単に失望するけれども、人生から期待される存在という生き方に変わっていく気づきの瞬間があります。それは人生の役割、使命感への気づきであり、死ぬ瞬間まで自分を成長させることができるという学びでもあるのです。間違いなく、「いい覚悟」で生きることにつながると私は信じています。

ハイビスカス
後生花　仏桑花　赤花

南国のイメージたっぷりのハイビスカス。沖縄南部で「後生花」ともよばれ、故人の後生（死後の世界）の幸せを願って植える習慣があるそうです。「一日花」で咲いたらその日のうちにしぼんでしまいますが、色とりどりの個性豊かなハイビスカスは、いま生きている私たちの目も楽しませてくれています・・
この夏私が見たハイビスカスをカードにしました。
花言葉　赤（勇敢）　白（艶美）　黄（輝き）

主催　岡倉天心記念　がん哲学外来・巣鴨カフェ「桜」
後援　一般社団法人がん哲学外来

今後の開催予定
10月9日（土）
11月13日（土）
12月18日（土）